



TITLE:

# 実践型地域研究ニュースレター：ざ いちのち No.17

AUTHOR(S):

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア  
研究所：在地と都市がつくる循環型社会再生のた  
めの実践型地域研究

---

CITATION:

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア研究所：在地と都市がつくる循環型社会  
再生のための実践型地域研究. 実践型地域研究ニュースレター：ざいちのち No.17. 実践  
型地域研究ニュースレター：ざいちのち 2010

ISSUE DATE:

2010-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/147122>

RIGHT:

# ざいちのち

まちやむら、そこに住む人ひと(＝ざいち)の、  
知恵や生き方(＝ち)から学び、実践する活動です。

実践型地域研究ニュースレター No. 17 2010年 3月



京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

亀岡市保津町 古浜

## 朽木フィールドステーション

### 山の生産力、人こそ生存基盤 (2)

滋賀県立大学/朽木 FS 黒田末寿

#### 2. 山の生産力：「幸」のイマジネーション

炭や木材のように大量に生産され商品として売り出されれば別だが、それ以外の山のものの評価は難しい。たとえば、ネソ（マルバマンサク）と呼ばれる灌木がある。かつて、筏で山の木を運ぶときや茅葺き屋根の合掌を組むときになくてはならない結束材だった。ツルではないが、若枝をよじって繊維状にしてから筋交い部などをこれでくる。すると、乾燥するにしたがって収縮し強固に緊縛するだけでなく、屋根にかかる強い歪み力を適度に逃がす柔軟性と元に戻る復元力が最高にすぐれていると言われ、いまでも合掌造りの家を補修するにはなくてはならないものだ。が、それで売れるというようなものではない。

もっと普通には、山芋や山菜や木の実がある。山菜などは言うまでもなく、かつての棕川や朽木には栗の木が多くあり、秋に山に行くと数時間で一斗籠にいっぱいといれたと言うし、カヤや栃の実も大量にとれ、手間さえ惜しまなければ美味しくなる貴重な食料源であった。私たちは、こういった山の生産物を山の「幸」とか「恵み」と呼んでいるが、聞き取り



写真1：トチノキ(一番手前的大木)

だけでは、どういう山でどれほどとれるものか、よくわからない。というのも、なり年の時など近場の山で拾うだけであとはたいがい放っていたからだ。私も子どもの頃アケビやナツハゼが大好きだったが、とり尽くせたものではなかった。ドングリもそうだ。あれでブタを飼い肥えさせてハムが作れるのではないかな。今

北哲也さんと私はそう思っている。

山の幸が「生産物」として多少なりと経済的にも評価されていたのは、戦争中までである。経済成長期には貧しさの象徴のようになり、現在は少数の扱いやすいものが、民宿などで「幸」扱いにもどったが、どういう物がどれほどの手間で利用できるのか、今となっては多くのことがわからなくなっている。私たちが「くらしの森」と呼ぶのは、人間の生業活動で作られる二次植生に極相林が合わさった森林で、こうした「幸」や「恵み」に満ちた山である。しかし、「幸」を「幸」にするイメージがなければ、ただの山にしか映らない。



写真2：カヤの実。ピーナツと炒り豆の間のような味

#### 3. 人こそ生存基盤

山に生きてきた人の話を聞いたり日記などを読むと、つくづく実感するのは、その人たちが実に豊かな知恵と技術を持っていたこと、働き者だったことだ。山の生産力をそれとして引き出すには、なによりも幅広い知識と熟練が必要である。知識がなければ、栃の実は石ころと変わらないし、ネソの用法を知っていてもコツがわかってなければ扱うのは無理である。そのような生活や生業の現場での知識は、農、林、漁、商、大工などさまざまな職能に渡る広い知識で、それをこなす力は、いうなれば「百」姓力だ。

働く力も大事である。身体を使うことをなんでも「重労働」と呼ぶようになった現代人は、山の斜面や木の大きさを労働感覚で捉えることができなくなっている。これは半日労働、あれは道具があればこう処理してこう利用できる、といった段取りを描いて把握する力と、自然の一つ一つへの深い知識が自然の生産力を最大限に引き出す。今北さんや永井邦太郎さんは楽しみながらそれをやっている。私たちが築くべき生存基盤は、このような「山の百姓」人の育成にあると結論したいのである。



### 牛糞と流木からみる自然と人間の折り合い ーバングラデシュで考えたことー

亀岡 FS 研究員 河原林洋

2010 年 1 月 16 日から 1 月 25 日まで、京滋フィールドステーションのメンバーとバングラデシュを訪れ、農村や河川流域に住む人々のいとなみを見てきた。そこで、私たち日本人が忘れかけている地域の自然や風土に対応しようとする人々の「折り合う術」を垣間見たように思う。

私たちが訪れたのは、タンガイル県のドッキンチャムリア村とキシオルガンジー県のサッキチョール村である。ドッキンチャムリア村は遠く地平線の望む田園風景が広がる村であり、サッキチョール村は河川の中州にある川とともに暮らす村である。

両村を訪れたのはちょうど田植えの時期で、一家総出で田植えをしていた。いまだに牛で田を耕す姿も見られる。しかし、その水田も雨季には水没するという。一番印象に残っているものは、道や庭先に所狭しと並ぶ牛糞である。牛糞は藁と一緒に練られ、団子状にしたものやクレープ状にしたものもある。雨季の燃料や家畜の飼料のため備蓄され、再利用されるという。これは、雨季に対する人々の知恵であろう。両村とも牛とともに暮らす文化が根底にあり、牛が生み出す資源が、人々の生存基盤となっている。



写真 1：団子状の牛糞（豊田知八氏撮影）  
両村とも牛糞を簡易燃料として加工していた。  
庭先は牛糞で足の踏み場もないほどである。

これらのいとなみを見て思い出したのが、亀岡市に住む元筏士や古老の話である。京都市右京区嵯峨の貯木場では、無用となったネソ、藤蔓やカシの木

が山積みされ、それらを地域住民が燃料にするため持ち帰ったという。また、亀岡市河原林町勝林島の人々は、在所の山がなく、焚き物の入手が困難であった。この地域の人々は、筏流しで無用<sup>①</sup>になったネソや棹、または、洪水時に漂着した流木を焚き物にした。この流木拾いは子供たちの遊び(仕事)であった。今では敬遠される河川の増水が、村の人々に恵み<sup>②</sup>をもたらしていたのである。山が生み出す資源が、川の流れや川仕事に従事する人々を介して、流域に住む人々の生存基盤となっていた。

人々の生存基盤である燃料の確保をとってみても、私の知る範囲ではあるが、バングラデシュと日本ではこれほど違いがあるところがおもしろい。日本とバングラデシュとのいとなみの違いは、その地域の自然形態とその資源の利便性が大きく影響しているように思える。バングラデシュではあまり山の風景を見ることがなかった。必要となる木材は庭先や道端に植えられていることが多いと聞く。山の産物を燃料として期待できない地域である。そこで着目したのが、バングラデシュの農村文化を形作る牛の糞だったのではないだろうか。

このように、日本人が忘れかけている地域の自然と風土とともに生きている姿にバングラデシュに住む人々の「折り合う術」を見たように思う。



写真 2：藤蔓とカシの木  
藤蔓とカシの木は、筏流しに何回も使われたそうだが、消耗したものは廃棄され、再利用できるものは筏士が持ち帰ったという。

#### 脚注

- [1] このあたりはかつて筏の係留地（明治初めまでは運上所もあった）であり、「千本杭」という地名が付くほど、何本もの杭が川岸に打たれ、多くの筏が係留されていた。元筏士の上田潔氏は子供の頃よくここで筏に乗って遊んだという。
- [2] 河川増水後の減水時に川縁によく魚が集まったという。この魚取りも子供の遊び(仕事)であったという。

### 開発（かいほつ）集落の暮らし（１）

#### －旧野洲川堤防の竹藪－

生存基盤科学研究ユニット 藤井美穂

本ニューズレター（４号、８号）で、野洲川の放水路建設の経緯について述べたが、今回は河川改修以前の守山市洲本町開発（かいほつ）集落の生活を紹介したい。

旧野洲川（河川改修以前の野洲川）の下流部は分流し、南・北流に分かれていた。下流部は川底が人家より高い天井川が形成されており、開発集落は、旧南流沿いに位置していた。旧南流の高い堤防には竹藪や松が鬱そうと茂り、まるで山のようなようだったという。改修工事（1971～1979年）において、ほとんどの堤防が削り取られたため、河川改修以前と開発集落の風景は変化したという。

改修工事以前、山のような堤防は、開発集落の暮らしと深く関わっており、人々に様々な恵みを与えていた。開発で生まれ育った北野秀和（ひさかず）（66歳）さんは、「昔は、冬、ポカポカと暖かったのに、今は、風が強くて寒くなった」と話す。堤防が削られて低くなってから、堤防が防風の役割をしていたことを実感したという。また、北野さんは、堤防が削られたために、堤防の竹藪が少なくなるだけでなく、生活の変化にともない、竹の生活資材の用途が徐々に減り、家屋の周りの竹藪も消えていったのでさびしくなったと語る。



写真：開発集落に残っている数少ない竹藪

堤防の竹藪は、その付近の住民が区画を分けて所有し、堤防を守るために竹を育てていた。竹藪にはマダケ、ハチクが多く、そのほかにモウソウチクなどがみられたが、上質の竹ではなかった。竹は生活資材として、配水管（本ニューズレター４号「野洲川と生きる－青竹の配水管による水利用－」参照）、野菜栽培の支柱、家の壁下、籠、稲木、田舟の竿などに利用され、食用として５月にタケノコを採り、タケノコご飯、みそ汁、つくだ煮などに用いられた。竹の皮は、殺菌力があり、食品の保水性に優れているため、食べ物を包んだり、魚の煮崩れを防ぐため、鍋の底に竹の皮を敷いて料理に使ったりした。特にマダケの竹の皮は、毛がなくて平滑なため、夏になると、人々は堤防に落ちたマダケの竹の皮を拾いに行った。

堤防は、竹藪の手入れのために伐採した竹や雑木や、落ちた枝葉などが薪となるため、燃料の供給源でもあった。「焚きもん」に欠かせない松葉を集める「松葉かき」は女性の仕事であった。初冬になると、高齢の女性たちが、堤防の中段から下段の下で「松葉かき」を行った。松葉かきのために、堤防の中下段で陣取りがあったという。開発集落では、燃料の備蓄は、家の経済力を示す重要な意味をもっており、家屋の座敷先の縁の下に１年分の割り木が積んであれば、「食うにこまらん金持ちの家」と言われていた。

また、冬、竹藪から竹を切ってソリを作り、堤防の斜面で遊んだり、竹藪に多く生息していたノウサギ狩りなどが、学校行事として行われていたりしていた。

こうした開発集落における堤防の竹藪の利用は、1975年頃まで見られたが、旧野洲川改修による堤防の取り壊しが進むとともに、現在、ほとんど行われなくなっている。

「竹が少なくなってさびしい」という北野さんの言葉をどのように受けとめ、理解したらよいのだろうか。今後の調査研究の課題の１つとして、この言葉の背景にある「何か」を開発集落の生活史を描いていく過程で考えていきたいと思っている。



## 催しのご案内

### ■実践型地域研究 中間成果報告会

1. 日時：平成 22 年 3 月 6 日（土）13:30～16:30
2. 場所：守山市生涯学習会館エルセンター  
（守山市勝部 3 丁目 9-1 JR 守山駅から徒歩 15 分）

### ■第 22 回 定例研究会

1. 日時：平成 22 年 3 月 26 日（金）16:00～19:00

2. 場所：守山 FS（滋賀県守山市梅田町 12-32）
3. 発表者：Saw Pyone Naing（ミャンマー・マンダレー大学副学長）  
発表内容：イラワジデルタのマウービン郡におけるナルギスの爪あとと復興 -小学校の校舎全壊からの復興を中心にして-

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

## 中間成果報告会 -2 年間の活動を振り返って- 生存基盤科学研究ユニット 鈴木玲治

当プロジェクトの活動が始まってから、もうすぐ 2 年が経過しようとしています。当プロジェクトでは、日本のかつての暮らしの中で伝統的に培われてきた知識や技術に目を向け、それを現代の暮らしにどのように活かすかを考えながら、日本の農山村や地方都市の望ましい将来像を構築していくことを目指しています。具体的には、守山、朽木、亀岡に設置した 3 つのフィールドステーション（FS）を拠点に、研究者、地域住民、地方自治体、地元 NPO 等、立場の異なる人々が協働しながら地域に根ざした活動を行い、各々の地域の問題把握とその解決に向けた実践的な調査研究活動に取り組んできました。また、アジア諸国の研究者を対象に、過疎化の進行する日本の農山村の現状とそこでの取り組みを紹介しながら、望ましい農村開発のあり方をアジアの人々と共に考えています。

この 2 年間の活動を振り返りながら、当プロジェクトの意義や今後の展望などを議論するため、3 月 6 日（土）に守山市生涯学習会館エルセンターにて、中間成果報告会を開催しました。当日は、大学の研究者以外にも、守山市在住の方々、守山市役所の職員、（株）みらいもりやま 21 の社員、琵琶湖の漁師、保津川下りの船頭、NPO のスタッフなど、様々な立場の人々にご参加いただきました。

守山 FS では、嶋田さんが琵琶湖漁師のナレズシを通してみた水産資源としての在来魚の可能性について、藤井さんが野洲川流域の調査を通じて在所の方から学んだことについて報告しました。朽木 FS では、黒田さん、今北さん、増田さんが、高島市棕川におけるホトラヤマ・カヤダイラの復元や長浜市余呉町における焼畑耕作を通じて、「くらしの森」の再構築を目指す活動について報告しました。亀岡

FS では、原田さんが保津川の水運に近世から現代にかけて関わってきた人々のしたたかな関係性について、河原林さんが保津川の筏流し復活を通じて、人・もの・地域を有機的に繋ぎ、保津川流域の活性化を目指す取り組みについて報告しました。また、海外関係の活動として、アジア諸国の人々との相互啓発により、お互いの国の望ましい農村開発や発展のあり方を模索する取り組みについて、矢嶋さんが報告しました。どの発表も、発表者の熱意のこもった力強いもので、これまでの 2 年間の取り組みをうまく伝えられたと思います。

なお、嶋田さんの報告は、発表に登場する琵琶湖漁師である戸田さんご本人を前にしてのものでした。嶋田さんの報告を聞き終えた戸田さんは、「10 年以上前からニゴイやカマツカなど、琵琶湖の在来魚のナレズシをつくってきたけど、自分でもその意味がよく分かってなかった。皆さんの前で三日三晩話をさせてもらっても、話しかれへんかも知れん思いを、10 分程度の発表にうまくまとめてくれた。さすが研究員や」と感想を述べてくださいました。その言葉は、嶋田さんのこれまでの取り組みや我々のプロジェクトが目指す方向性が間違っていなかったとの自信を与えてくれるものでした。今後も、地域と深く関わりながら、各々の地域に根ざして生きる人々の様々な取り組みや思いを共有し、それを分かりやすいかたちで情報発信していけるよう、頑張ろうと思います。

最後になりましたが、本中間成果報告会にご出席いただいた皆様に、この場をかりてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



写真：亀岡 FS 研究員河原林さんの発表